

テハ条件文の構造と談話的な機能

田 中 寛

キーワード

テハ条件文, 発話意図, 見越し, 理由条件, 引用提題

1. はじめに

「テハ条件文」とは「テハ」で導かれる従属節（条件節）と、それを受ける主節とからなる文をさす。本稿ではテハ条件文の従属節、主節に見られる構文的性格と、テハ条件文自体の文脈における談話的意味構造、発話行為という観点から、その使用の姿勢、背景を考えてみることにする。

考察の出発として「テハ」の構造に着目し、動詞をはじめとする中止形の多義性ととも「ハ」の本質がどのように関与しているかを検証する。二つ目としては従属節、主節の構文的特徴と表現性が、テハ条件文の前後に位置する文環境において、どのような機能性をもつのかといった点を明らかにすることである。前者においては新事態の発生を誘導づける必然的な意味背景をさぐり、後者では「テハ」と「テモ」が競合的にあらわれる例などを見ながら、テハ条件文が既知の情報にもとづき、それらの関係性において推敲的、内省的な意図で用いられる特徴を指摘する。テハ条件文については従来から多くの研究が蓄積されてきたものの、こうした構造と意味、さらに談話的展開との関係は不十分なままであったように思われる。テハ条件文に見られる条件設定のあり方と叙述展開の特徴をさぐることは、ひいては条件表現そのものの本質にも深くかかわることでもあろう。

2. テハ条件文の諸相

2. 1. 基本的構文と派生的構文

「テハ」は日本語教育では許可をあらわす「Xテモイイ」と同時的に禁止をあらわす「Xテハイケナイ」の形で導入されるのが最初である。しかし「テモ」が逆条件文の「Xテモ, Y」や無条件文「イクラXテモ, Y」などの複文へと拡張されるのに対し、「テハ」のほうは「Xテハコマル」「Xテハダメダ」といった複合辞的な文末表現を除けば、複文「Xテハ, Y」の運用については定かな説明はなされていない。テハ条件文の制約が既習の条件表現と比較して明らかにされなければ、教授者側にも正しい指導指針が得られないであろうし、学習者にとってもその把握は困難であろう。一見、対照的な配置に見える「テモ」と「テハ」も、その運用範囲の実態と認識の仕方には、かなりの偏りが見られることがわかる。

ここで、本稿で用いる構文の名称について解説しておきたい。

「テハ」は動詞文をはじめ、形容詞文、名詞文にも接続して、「テハ・デハ」、「クテハ」、「デハ」の形になるほか、否定形接続もそれぞれ見られる。一方、前件を間接的、直接的に受ける「ノデハ」、「デハ」などの派生形も観察される。本稿では前者を基本的構文、後者を派生的構文というところえかたをして、その双方を体系的に「テハ条件文」とよぶことにする。なお「チャ・ジャ」、「ンデハ・ンジャ」といった口語形についても、上記の「テハ」「ノデハ」の類に含めて考える。

ここで構造的特徴として注意したいのは基本的構文、派生的構文にみられる「デハ」である。前者の「デハ」は名詞、形容動詞に接続するほか、普通体を受けて「～ヨウデハ、～ダケデハ、～ママデハ」などの使われ方をするが、後者の「デハ」は前文を直接受ける用法で、構造面、運用面において前者に見られない特徴がある。後者には先行文脈に依存する傾向が強くみられ、談話的な機能、ふるまいが顕著である。ここからまた「～ナクテハ」と「～ナイノデハ」「～ナイデハ」に見るような「テハ」と「ノデハ」、及び「デハ」との相関などにも注目していく必要がある。

2. 2. テハ条件文の使用範囲

まず、基本的構文であるテハ条件文は、その多くがあらわれる動詞文接続について観察すると、既定条件と反復をあらわす用法を有することは、従来の指摘からも明らかである。¹⁾

1. 今頃散歩に出かけては、夕食の時間に間に合わなくなる。

2. うちの主人は散歩に出かけては、何か拾って帰ってくる。

同じ「散歩に出かける」という行為が前提句となっているが、2.の反復の方は「～すると必ず～／～度にいつも～」という事態の習慣的な生起関係がこれまでの経緯から説明されるのに対し、1.の既定条件の方は「今頃」といった時間限定が明示的で、その環境の下で以下のことが発生する可能性（多くは否定的現象）が大なることを述べる、とほぼ解釈される。形容詞文接続の「クテハ」、名詞文接続の「デハ」、さらに広く否定形接続の「ナクテハ」は基本的に1.の既定条件しかあらわしえない。このほか、

3. 守っては7回2死満塁を三振に切って落とし、…

4. この問題をめぐっては従来から深い関心が寄せられて、…

のような用法も多く見られる。3.は「攻めては～、守っては～」という対比構文での「ハ」の用法で、一方の対比句が省略されることも多い。

「～の面では」といった意味では「ハ」の取り立て的な機能とみることもできる。また、これには累加、添加の意味では「守っても」のように「テモ」との意味的な重なりが見られる。4.は動詞シテ形の後置詞を「ハ」で取り立てたもので「～については、～にしては、～をめぐっては」など「ハ」の付加を許すものもあれば、「*～につれては、*～をかねては、*～にちなんでは」のように「ハ」をつけると不自然になるものもある。²⁾

一方、派生的構文を見ると、「ノデハ」も「トイウノデハ」「デハ」も基本的に1.の既定条件の用法しか観察されない。しかしこれらには基本的構文にはみられない文接続の表現的な諸特徴が介在し、前提内容を含意した含みが強くあらわれるという特徴をもつ。こうした「ノデハ」などのテハ条件文についてはまだ運用上の特性が解明されているとはいえない。

このように、テハ条件文には種々の形態と意味用法がみられるが、まずテハ条件文の本質として、「ハ」のもつ情意的な性格にかかわる表現意図の分析からはじめることにする。

3. テハ条件文の本質

テハ条件文は次のように故事、ことわざの中にも散見される。

5. a. 郷に入っては郷に従う.
- b. 腹が減ってはいくさは出来ぬ.
- c. 急いては事を仕損じる.
- d. 老いては子に従え.
- e. 過ちては改むるに憚ること勿れ.
- f. 飢えては食を摂ばず. …

いずれも教訓的な警告、勧告の趣旨が込められているが、タラ、レバなどの条件節ではなく、テハを用いたこのような表現意図を考えていく際、「テ」の多義的な意味と同時に、「ハ」の本質をほりさげる必要がある。「テハ」においてシテ形を一つの動詞の自立的な形（中止形）と考え、これに係助詞「ハ」がついたものとすれば、それは一つの提題的な意味にはかならないが、それと後文の叙述展開における意味的な関係については不明な点が多い。次にテハ条件文を構成する「ハ」の本質的な意味を他動性、取り立て性、引用・例示性の三つの要素を指摘しながら考察する。

3. 1. 「ハ」の“他動性”

ここでいう“他動性” transitivity とは、ある事態が何らかの内的、外的状況の影響をおびて、新しい事態を生起させるという性格を意味する。

大野晋(1993)は山田孝雄が中止形の「テ」が完了の助動詞「ツ」の連用形であることをしばしば述べていることを受けて、

「ツ」は、動作の完了あるいは動作の確認を意味する語であり、テハの型に属するものについてみると、テはたしかに確認または完了の意味が加わっている。…

としたうえで、後件に逆接的、否定的な意味が展開する事態においては、

ハは題目提示の助詞であるから、その上に来る叙述をテによって、

「タシカニ…デアッテ」と確認しておきながらその判断をハで承け

るとは、判断そのものの可否を再び問題とするところである。これ

は以前の決定を覆すことになる。（傍点部分は引用者）

という特徴を記している。³⁾ いわば、直接的に判定を下すのではなく、一旦、既知的な情報を共有理解の要目として提示したのち、予期しうる事態の発生をその場における見解として表明するところに、この「テハ」の情意の特徴がある。しかし、前提句と帰結句とが対応し、照応する局面にあらわれるこの「ハ」がなぜ以前の決定を覆すことになるのかという点については、その仮説を補強するほかのいくつかの特徴を考える必要がある。

一つは「ハ」のもつ分説的な「ハ」の働きであると考える。この「ハ」は従属句の内容を主文に受け渡す、あるいは連繋、連動するという機能が顕著で、前件と後件を連続的な一現象としてとらえる働きが認められる。

6. 嘘をついては、人間の値打ちが下がる。

このような複文の意味構造を考えてみた場合、「うそをつく」、「人間の値打ちが下がる」という二つの〔コト〕的事態が認められるが、これは、

6'. [嘘をつく] ことは、[人間の値打ちが下がる] ことにつながる。
という等位的な構造にパラフレーズされる。端的に結論を述べる際には、

6". [嘘をつく コト] は、[人間の値打ちが下がる コト] だ。
といった名詞文としての述定の仕方も可能である。これは個別的な事態を一般的、普遍的な事態に“敷衍して”述べる言い方である。こうした複文においてP、Qの関係を論理的、筋道的にたどっていくならば、

7. [Pデアル コト] ハ、[Qデアル コト] ヲ モタラス

というように、「ハ」には前件の旧事態〔Pデアル コト〕から後件の新事態〔Qデアル コト〕を引き起こす、“他動的な働きかけ”が潜在的に認められ、そのきっかけ的要因を提題化することによって、新事態の出現が起こり得る道理を示唆している。主節における新事態は、「ハ」によって旧

事態から不可抗力的に出来^{しゅったい}、ないし惹起される性格のものである。このように、「ハ」には中止形とともに経験的に予期された新事態を誘導する、他動的、使役的な意味が認められ、前提句（従属節）が帰結句（主節）を導くという“等位的”な認識が背景にあることをまず指摘しておきたい。

3. 2. 「ハ」の“取り立て性”

テハ条件文の本質をなす二点目は「ハ」の取り立て性に見られる。ここでは動詞中止形を代表としてとりあげ、「テ」のさまざまな意味が「ハ」によって取り立てられた場合の意味的なあり方について確認⁴⁾して見よう。

[手段・方法]

8. a. 車に乗っては買物へ行く。

b. 辞書を引いては意味を調べる。

上例ではある事態を習慣的にとらえて、意図的、定例的な事態が明示される。二つの習慣的行為が無条件に一定の意図的な行為事態を生産する場合のほか、「テハ」が限定的な語句をとともなう場合は、

9. a. いつも車に乗っては運動不足になります。

b. ただ辞書を引いては調べたことにはならない。

のように因果的な既定条件となつて後件には否定的な事態があらわれる。

[仮定]

10. 駅からどのくらいかかりますか。

一歩いては／歩いてでは20分かかります。

上例の応答文における「歩いては」は、例えば「走って行く場合」や「車に乗って行く場合」という他の複数の事態を潜在的に設定、対比させた一例示としてあらわれている。「歩いてどのくらいかかるかと言えば」という問題設定を自ら述べ、それに応ずるという姿勢である。この「テハ」は完結した文としては落ち着きは悪いものの、応答文のなかでは用途や移動手段の「テ」の用法の提題化、及び事態の対比的な明示がなされる。「歩いて」「走って」「車に乗って」といった行為をそれぞれの既知の個別的手段ととらえれば、「歩いてだったら」「車に乗ってだと」などと等しく、

「デハ」による「歩いてでは」のような取り立て表現も可能となる。

[原因・理由]

11.? a. 風邪を引いてでは仕事を休んだ。

? b. 雨に降られてではずぶ濡れになった。

かりに、前件の事態と後件の事態との間に特定の有契的な関係を認めれば、反復の現象が観察されるが、通常は二つの別の事態をそのまま結びつけただけでは意味的には不十分である。これは次のような付帯的な状況説明が述べられなければ、後件の事態は明示されにくい。

11'. a. たびたび風邪を引いてでは仕事を休んだものだ。(反復条件)

b. こう雨に降られてでは, ずぶ濡れになってしまう。(既定条件)

原因、結果の関係も基本的には繰り返しの様相を呈する。

12. あの頃は親から手紙をもらってでは安心したものだ。

これはいわばある一定の期間における事態反復を回想的に述べたものであるが、同様に付加的な限定、説明語がないと不自然である。

[動作の継起]

13. a. 朝起きてでは髭をそる。

b. 散歩に行つてでは新聞を読む。

動作行為の順序の場合、「ハ」でとりたてると反復の意味が生じる。「朝起きて髭を剃る」は二つの動作の一連の関係であるが、「朝起きては髭を剃る」ではその一連の動作の日常的、習慣的繰り返しということになる。

[並列・対比]

14.? a. ここには温泉があつてでは, 川が流れている。

? b. お爺さんは山へ行つてでは, お婆さんは川へ行く。

この場合は「テハ」がきわめてあらわれにくい。強いては反復習慣の意味も内在しないわけではないが、基本的には非用に近い。役割分担の場合は、

15. a. 妹が材料を切つてでは, 姉が料理する。

b. 昼間バイトしてでは, 夜学校に通う。

a. のように二つの主語が異なる場合は主題化、対比的な意味は薄れ、む

しる習慣的な意味があらわれる。b.のように主語が同一である場合は繰り返しの意味よりは、対比的な意味があらわされる。

[同時進行・様態修飾]

16.? a. 元気よく手を降っては会場を行進した。

? b. テレビにかじりついては日本シリーズを見た。

この場合も非用に近い。同様に「*競っては買物する」「*あやまっては川に落ちる」のような動詞の副詞的用法にはテハはあらわれにくい。ただし「親の目を盗んでは電話をかける」のような様態修飾句の場合は、具体的な反復行為をあらわすこともある。16.の用例で前後を入れ替えると、

16'. a. 会場を行進しては元気よく手を降った。(行進するたびに)

b. 日本シリーズを見てはテレビにかじりついた。(見るたびに)

文末の「～ものだ」の常態を含意して、繰り返しの事態があらわされる。これは「会場を行進する」、「日本シリーズを見る」ことの行為が主で、「手を降る」、「テレビにかじりつく」行為が付帯的で、後者を取り立てる必然的意味を認めにくいことによるものであろう。

[逆接]

17.? a. 知っていては教えない。

? b. 免許を持っていては車に乗らない。

ここでは「テ」自体がそもそも逆接をあらわすことから、「ハ」をともなっても、既定条件も反復の意味もなさず、むしろ非用に近い文となる。

こうしてみると「テ」には「ハ」をともなって意味をなす場合と、非用になる場合とがあるが、前者では一部対比的事態のほか、ほぼ反復的な事象としてあらわれることが分かった。「ハ」の特質は、題目提示と対比の意味を背後に持ちながら、個別的な事態を一般的な事態へと拡大解釈し、結論としての集約的な事態を導くものといえよう。以上は、事態の対比性、反復性といった現象をみる視点を与えるものであったが、「ハ」によるシテ形接続の取り立てという性質だけからでは、既定条件とそれに続く後件との意味関係の成立を明らかにしたことはない。

3. 3. 「ハ」の“引用、例示性”

一方、「ハ」が前件をそのまま受ける分説性を考えると、

18. [風邪をひいて (…仕事を休んだ)] は理由にならない。

題目提示となる前件を一つの具体的な出現事態ととらえて「～ということ」のような引用的な表現も成立する。このような「ハ」には、

19. [結婚する結婚しない] は私の自由だ。

のような発話命題をそのまま引き継ぐ機能が見られる。すなわち、「ハ」には提題的、取り立て的な機能とともに、後件の叙述を誘導する、いわば契機条件を設定するという引用的性格がみとめられる。既定条件も反復の意味も本質的にはこうした引用的な機能のもとに等しくあらわれる姿といえよう。ただ、次のような場合では、引用された主題が既定条件なのか、反復行為なのか判然としないことがある。

20.? 風邪を引いては、仕事にならない。

このような場合も指示詞などにより程度を示す付加的説明が必要とされる。

20'. こうたびたび風邪を引いては、仕事にならない。

「こう」といった「風邪を引く」事態に対する限定、特定化が働いて初めて、具体的な既定条件が提示されるし、「たびたび」などの頻度をあらわす副詞によって、経験的な推論から反復的な事態が含意される。また、

21. 風邪を引いては仕事を休む／家族に迷惑をかける…

という文では、前提句（従属節）が主文の発生条件を恒常的に満たしている場合、繰り返しの状況が提示されるが、次の場合は矛盾が起こる。

21'? 風邪を引いては仕事を休まない。

「風邪を引いても仕事を休まない」のであれば主張事態として成立するが、この文では常識的な事態関係としての「風邪を引いて仕事を休む」とことと相容れない。前述の「ハ」の他動的な意味解釈によれば、「風邪を引くコト」が「仕事を休まないコト」を生起させることにはならないわけである。

なお、こうした引用的な機能は例示的、限定的な意味も含意する。しばしば「テハ」の慣用的類型として「～ヨウデハ」「～ダケデハ」「～ママデ

ハ」があらわれるが、そこではある眼前の、もしくは既出の事例にもとづいて判定をくだすといった依拠的な性格が観察される。

22. たしかに妻の下着もうまく替えられないようでは、側にいてもあまり役に立たないが、… (麻)

23. 財政再建のための具体的な処方箋を提示しないまま、凍結論がまかり通るようでは、日本の国家財政は破たんする。(読売1996.9.28朝刊)

「～ヨウデハ」は「～ヨウナコトデハ」という例示をもって、事態のなりゆきを再認識しようとする気持ちをあらわしている。⁵⁾ 以下の用例においても同様の趣旨が感じられる。

24. あいつは気性の激しい男でした。でも激しいだけでは、あの戦いを最後までくぐり抜けることはできなかったはずです。(六)

25. 戦後処理は単に過去のことではない。これをきちんとしないままでは近隣諸国との信頼を確かなものにできないという、将来の問題でもある。(朝日1994.9.2.朝刊)

以上、「テハ」を構成する「ハ」の本質について、題目提示とその解説を兼務とする分説的性格から“他動的”な統括機能を、また取り立て性、⁶⁾ 引用、例示的な性格から、既知的な情報を提示する意味機能を考察した。

4. テハの発話意図

4. 1. 従属節にみる特徴

「ハ」の本質を考えることによって、「テハ」が事態の不可抗力的な発生を誘発することの特徴を論じたわけであるが、次に従属節の構造的な特徴をみると、多くの用例を分析した結果、二つの傾向が見られる。ひとつは「～してしまう」という過失の事態、もうひとつは受身表現が被害の事態としてあらわれるケースである。

26. 胃内写真機の管の先端が胃壁にぴったりついてしまっては、胃壁は写らない。(光)

27. ちょっとした失神や発熱ですめば、房内規則の通用で充分なのだが、

死んでしまつては、加害者は傷害致死罪をまぬかれぬ。(日)

いずれも話し手から見て不慮とも思える事態発生である。それを受けて、主文では不可能な事態、不都合な結果が提示される。「～すれば以下のことは自明である」とする論理がすでに話し手の経験として熟成され、その認識をなぞって評価や批評をくだすような気持ちがみられる。同じく過失的な事態を想定する際に、「テハ」の前に受動文も比較的多く観察される。

28. 会社の都合にばかり振り回されては、生活にゆとりなど生まれない。(男)

29. 真昼間、人通りも少ないこんなところでわが子の自転車を調達しているのを近所の口うるさい主婦たちに見とがめられては面白くない——(阿)

30. 「ボクに打たれるようでは、よほど調子が悪いんでしょ」とまで言われては、巨人の稼ぎ頭も形なしだ。(朝日1984.9.21.)

30.のように「～と(まで)言われては」もよく見られる誘導表現で、主節の内容を注釈的に意味づける働きがある。また受動文と類似的な用法では、

31. a. 職場にTシャツにジーンズで来てもらつては困る。

b. 今この忙しい時期に会社を辞めてもらつては迷惑だ。

のような「～してもらつては(困る)」という慣用的な言い方にも話し手の想定する被害性があらわされる。このとき、従属節には社会通念として受け入れられる共有的な情報(例えば「職場にTシャツにジーパンで来るのはよくない」こと)をあらかじめ示唆するために、「こんなふうに」などの指示代名詞句をとまなう場合も多い。⁷⁾ 過失や受身(受益)の表現をとまなう前件が、後件の否定的現象と連動するという一体的な現象は、テハ条件文の性格をみるうえで興味ぶかい。

従属節にみられるもう一つの特徴は動詞中止形を用いた後置詞に「ハ」をとまなう言い方で、「ノ」や「コト」を用いずに前件の事態をそのまま受けるものである。結果事態をみちびく「～に及んでは」、「～に際して

は」,「～にいたっては」,「～にのぞんでは」などがその例である。

32. まして,某省次官のこんな特権官僚ぶりを聞くに及んでは,あいた口がふさがらない。(官)

33. あまつさえ,その強奪に対して何らの罪の意識も感じないにいたっては,法と秩序と良識を守護すべき立場の者として断じて許すべからざる犯罪として認定せざるをえません。(日)

また,引用句との構成による「～とあっては」「～ときては」「～とな⁸⁾っては」なども前件事態にもとづく後件事態の必然性を述べる働きがある。

34. もともと,「人事の風越」は省内では影響力大な人間であったが,その風越が次官目前とあっては,省内にはただ風越色の風が吹くといった感じで…(官)

35. …しかし,一点負けている上,中軸が手薄なオリックス.二死とな⁸⁾っては得点機も遠のく.しかも先発野田が不安定となれば,勢いに乗っていくしかない場面だったろう。(朝日1995.8.28.朝刊)

こうした従属節に見られる特徴は,提題的な性格をより明示的に補強するものであり,言及する知識・情報の聞き手との共有化姿勢がみられる。

4. 2. 主節にみる特徴

主節には前件にもとづく話し手の主体的な判断がくだられるが,その叙述的性格としては次のような慣用的いいまわしがきわだって観察される。

36. 先が思いやられる,迷惑だ,迷惑千万だ,かなわない,どうしようもない,何にもならない,しめしがつかない,たまったものではない,たまらない,男がすたる,先行き不安だ,いかんともしがたい,おぼつかない,世も末だ,うかばれない,助かるものも助からない,手遅れだ,遅すぎる,救いがない,先が知れている,聞いてあきれ,救われない,人間もおしまいだ,損だ,取り返しがつかない,きりがいい,大変だ,可哀そうだ,プライドにかかわる,まずい,元も子もない,身もふたもない,開いた口がふさがらない,立つ瀬がない,形無しだ,すまない,すまされない,許せない,角がたつ,

本末顛倒だ、にっちもさっちもいかない、…

さらに、補文をうける慣用的な述語表現がある。

36'. ~のももっともだ、~のもうなづける、~のも仕方がない、~のも無理もない、~に決まっている、~のは必至だ、~のもわからないわけではない、~のようなものだ、…

これらにみられる叙述的特徴は総じて、否定すべき事態、禁止すべき事態の承認であり、一種の情意をまじえた批判的判断、評価の態度である。こうした結論の抽出のしかたをみると、多分に山田孝雄の⁹⁾いう喚体的な性格を帯びる性格のものである。すなわち、「身もふたもない」といった表現は従属句の省略はあってもそれだけの独立した用法は存在せず、従属句の内容が一種の経験的な前提となって導かれた一体的認識とみなされる。外的な状況を受けながら、その付加価値を必然的に認めようとする姿勢である。以下の例においても、結論的な裁断がくだされる形になっている。

37. 法的に活動を支援するのは結構だが、「監督官庁」による指導や規制が強まっては何にもならない。(朝日1995.3.19.朝刊)

38. 「女房が無精だと男は出先でよく恥を搔くんだ。よく見ておきなさい」こんなことで笑っては男の沽券にかかわるという風に肩をそびやかして奥へ入って行った。(男どき)

これらは聞き手目当ての意識が強く、個人的な見解を一般的な通念へと拡張し、批評させている向きがある。なかでも「~テハナラナイ」、「~テハイケナイ」、「~テハ困ル」などは一種の文末複合辞と化したもので、後続句表現、もしくは助動詞的な表現に近づいたものとみなされる。

39. あの敗戦後の混乱期に、飢えに苦しむ日本人のために、アルゼンチンが救援物資を贈ってくれたことを私たちは忘れてはならない。(朝日1986.7.15.朝刊)

40. 国の指導者は後ろ向きの政策を掲げる偏狭な強硬派の言いなりになってはいけない。(朝日1994.9.6.朝刊)

不特定多数の聞き手に向けての禁止の呼び掛けをあらわす「~てはならな

い」は婉曲的な「～てはなるまい」の形で用いられることもある。これには共通して「～するべきではない」という回避の警告、自戒の気持ちが込められる。このほか慣用的な文末述語表現としては「～てはたまらない」、「～てはかなわない」、「～てはまずい」などがある。ある種の敬遠、拒絶、不満、遠慮などの話し手の主体的な心情を強く示す点で共通している。

41. …それを聞きかじりや、新聞の見出しくらいを読んで、わかったつもりで喋られてはたまらない。(北)
42. …その軽い気持ちをいちいちとがめだてされてはかなわない、という反発も男性側にはある。(男)
43. 「まだ、あきらめては駄目だよ」野中医師はそういうと、諭すように言った。(麻)
44. 「あら、こんなにいただいては悪いわ。夕べは時間も遅かったのに」(都市)

また、テハの後にあらわれるモーダルな判断要素という側面に注目すれば、説明的なムード、蓋然性を示唆する表現（～かねない、～ことになる、～ことにはならない、～してしまう、～はずがない、～わけにはいかない、～おそれがある…）が多くあらわれる。これは前提句にあらわれた事態にそって考えた結果、招来する事柄が話し手の認知的な視点から分析、把握されたもので、結果事態の推移を見守る背後にはそうした事態を回避したほうが賢明だとする経験的認識が含意されていることを示している。

45. やはり胃潰瘍だな。小さい血点がたくさんある。こんなに小さくてはバリウムをのんでレントゲン透視をしても写らないはずだ。(光)
46. すべて家族のいいなりになって従っていては手間がかかるし、患者に差別をつけることにもなりかねない。(麻)
47. 清純派のヒロインに男とのうす汚れた同棲の過去があったとわかっては、完全にイメージダウンしてしまう。(殺人)

断定的に結論をくだす言い方にも話し手の主観的な経験にもとづく裁量に重点がおかれる。ここでも主文の文末において詠嘆的な叙述性が感じとら

れるものも少なくない。¹⁰⁾

48. いろいろある会議のなかでも今回ののはとくに重要な会議だったが、
直接話したいといわれては、断るわけにはいかない。(麻)

49. あまり逆らってばかりいては、自分に不利になるだけだと思いつつ
もそのような警察の体質に反発を感じてしまうほどだ。(崖)

以上、「テハ」の条件文にあらわれる情意的側面をみてきたわけだが、
総じて述定部分から帰納的に「よってかくあるべし」とする希望的観測や
要望が反自制的に含意される点にこそ「テハ」の主張があるとみてよいで
あろう。¹¹⁾ こうした理由を含意する条件とともに、結果を見越した話者の評
価判断、表現意図は、次の派生的なテハ条件文にも基本的にひきつがれる。

5. 派生的構文の「テハ」

ここで扱う派生的構文の「テハ」とは、「何も食べないのでは」、「何も
食べないでは」のように補文節を間接・直接引用的に受ける形式を指す。
以下「ノデハ」、「トイウノデハ」、「デハ」などの形式について考察する。

5. 1. 「ノデハ」の用法

「テハ」が準体助詞「ノ」をともなう「ノデハ」の形で間接的に命題を
引用する表現を“間接引用提題の「ノデハ」”と呼ぶことにする。

今回の用例収集では、「ノデハ」の形式が予想以上に多く観察された。
「ノデハ」の「ノデ」は「～ノダ」に見られる前提、既知情報の認知とい
う機能を共有して、いわゆる既定条件の一般化が強化される。この「ノ」
は、「～ノだから」、「～ノには」、「～ノなら」などの「ノ」と同様の使わ
れ方をしており、既に起こったこと、また既に起こることと目される事態
を設定して最終的な可否の判定を後件にゆだねる。なお本稿では「ノデ
ハ」は理由・原因節の「ノデ」の「ハ」による取り立てという見方はせず、
補文節を名詞化する「ノ」を「デハ」によって提題化したものと見なす。¹²⁾

「ノデハ」の前には、多く「～シタ」の形、つまり完了を表す既定条件
が、また後件には「～テシマウ」「～コトニナル」などの表現がみられる。

これらの用法は基本的には前節の「テハ」の基本的構文と同様で、品詞的な接続の特徴を見ても動詞文が大部分である。

50. 自分以外の多数の人達の苦勞にいちいち関心をもっていたのでは、
自分自身が失われてしまうであろう。(麻)

51. 難問を先送りしたまま、誘致合戦が過熱し、首都機能の移転構想が
独り歩きしていくのでは、将来に禍根を残すことになる。
(読売1996.6.13.朝刊)

後件には蓋然性を示すほか、強い断定の調子の表現が多くあらわされる。

52. ただでさえ難しい法案なのに、そっぽを向かれたり、じゃまされたりしたのでは、どうにもなりません。(官)

53. …ホテルのルールがあるだろう。一方で車を待たせておいて、一方であとから来た車に客を乗せていたんじゃ、しめしがつかない。(東)

「～スル／シタことを考えた場合には」という議論のケースを提示する点では、タ形以外の非タ形のものも等しく機能する。

54. 予算編成で首相は-%枠堅持を表明している。それでいて舞台裏では撤廃やむなしの世論操作をするのでは、政治が分かりにくいと思う。(朝日1985.8.23.朝刊)

55. 病院に来て、医師や看護婦を信用しないのでは、なんのために病院にきたのかわからない。(麻)

「テハ」とくらべた場合、「ノデハ」には既成事実の持ち出しやそれとの抵触といった背景から、後件の叙述認定の一般化は強くあらわされる。¹³⁾

5. 2. 「トイウノデハ」の用法

間接引用提題の「ノデハ」の類似・派生形式に「トイウノデハ」がある。この「トイウ」には総じて伝聞の原義から一般化への拡大的な意味解釈がみられ、結果として「トイウノデハ」は「ノデハ」よりもさらに引用提題化が意識的に強く働き、客観的、一般的な立場からの認識が前面に押し出される。同じように「トイッタノデハ」の形もまれにみられる。

56. 旅行会社のモデルプランにさせられて、おしきせの観光地に運んで

もらうというのでは、もう面白くない。(朝日1984.9.2. 朝刊)

57. 走って負けたのならその経験を次に生かすこともできるが、ただ選手村に入っただけというのでは、何の収穫ももたらさない。(バ)
「ノデハ」よりも、更に一般的、客観的な規定をもとめる特徴は、文末においても話者の明確な主張とな¹⁴⁾ってあらわれやすい。

58. 漁場はいまも有望だが、噴火のおそれがあるというのでは、振興開発するわけにはいくまい。(朝日1984.6.2. 夕刊)

59. …それに一方的に一週間だけ入院したというのでは、引き受けた側の医師も看護婦も、いま一つ身が入らないのも無理はない。(麻)
下線部分「わけにはいかない」「のは無理もない」は、「トイウノデハ」を受けて、その結果が正しい方向性をもつことを確認する。この「トイウノデハ」も「ノデハ」のように普通体に後接する点では共通しているが、「ノデハ」と異なるのは後に述べる「デハ」の直接引用(「何も食べないでは」)と同様に、言い切りの文をそのまま受けることが可能な点である。

60. a. 土下座して謝れというのでは、言葉がすぎる。(×ノデハ)

b. 単に時間がなくてというのでは、理由にならない。(×ノデハ)
つまり「ノデハ」は直接に眼前の事態現象を受けつぐことができないが、「トイウノデハ」はそれが可能である。b.の例では、「(時間がなくて)書けなかった」という後の結果が内包されており、いわば一種の省略文の体をなしている。さらに「トイウノデハ」が「テハ」とも「ノデハ」とも異なる点は、前接にモダリテイ的な要素があらわれうることにある。例えば、「テハ」の従属節において、

61.*a. 彼が病氣らしくては、誰かが代わりに行くしかないだろう。

*b. すぐに転勤しなければならなくては、家族がかわいそうだ。

*c. 誰にも会いたくなくては、そのままにしてあげればいい。

のように、「らしい」「なければならぬ」「たい」をそのまま「テハ」や「ノデハ」で受けた場合、文の座りがきわめて不自然であるが、

62. a. 彼が病氣らしいというのでは、…

b. すぐに転勤しなければならないというのでは、…

c. 誰にも会いたくないというのでは、…

のように「トイウ」を介することによって、前提内容を命題化する手続きがとられる。¹⁵⁾「トイウノデハ」は「トイウノデアレバ」にきわめて近い。

5. 3. 「デハ」の用法

「デハ」の前に「ノ」も「トイウノ」も介在せずに、理由条件となる事柄をそのまま直接に後件に結びつける場合がある。基本的構文の「デハ」と区別して、ここでは“直接引用提題の「デハ」”と称することにする。

63. a. 「(エイズ資料が) まだあった」では済まされないだろう。

b. ただ、教えてくださいでは、何を教えていいのか分からない。
のような例では、「デハ」の前には発話内容がそのまま提示されている。これらの事態はすでに周知の事柄であり、相手の言辞をそのまま受け継いで批判したり反論したりするような特徴が見られる。いずれにしても、結論として眼前の事柄を取り立てて、より一般化しつつ、直接的な条件とみなして結論がくだされるのである。次のように事態の背景をあらわす因子をあげて、結論を導く言い方も多くみられる。

64. a. 酒は飲む、煙草は吸うデハ、健康を害するの無理もない。

b. サービスは悪い、品数は少ないでは客も寄りつくはずがない。

こうした複数の条件提示では「デハ」による直接引用は許容されるが、次のような単一の事態設定だけでは「デハ」「トイウノデハ」による接続は不自然で、代わって前述の「ノデハ」が用いられる。

65.*a. そんなにお酒を飲むデハ、体をこわすだろう。(→ノデハ)

*b. 今から出かけたデハ、間に合わないだろう。(→ノデハ)

上記のような複数の要件提示以外に直接引用提題の「デハ」による接続が成立する背景を考えてみよう。直接引用の「デハ」と間接引用の「ノデハ」の違いは、「ノデハ」が個別的な事態を一般的な事態へと敷衍するのに対し、「デハ」のほうは主観を交えず、ありのままの事態から予想される結論を提示するところに特徴がある。一般にある行為、現象が共通の事

実認識として話し手と聞き手の間に設定されており、眼前の完結した発話文が接続の対象になる場合、複数の要件提示は必要とされない。

66. a. [一時間も遅刻して入室した] デハ, 注意されても仕方がない.
b. [あんな大切な約束を忘れていた] デハ, 話にならないだろう.
このように「デハ」は通常は動詞文のタ形、非タ形を問わず、自由な文接続が見られるが、形容詞文、名詞文では、ほぼ非タ形に統一される。

- 67.*a. こんなに値段が高いデハ, とても買えない.
b. サービスも悪い, 品数も悪いデハ, 客も来ないだろう.
*c. 何も食べたくないデハ, 元気も出ないだろう.
d. 駅から遠い, 交通が不便だデハ, 買い手もなかなか決まらない.
単一の文よりは並列文のほうがデハで受けやすいということは、呈示という行為をより明示することで根拠の成立を認めやすくなることを意味する。
また直接引用命題の「デハ」が丁寧体をそのまま受ける点も「ノデハ」「トイウノデハ」と異なる特徴的な性格である。相手の言った一言をすぐに反復して切り返すのもこの「デハ」によく見られる応答の方略である。

68. a. 遅れましたデハ, 理由にならないでしょう.
?b. 遅れましたノデハ/トイウノデハ, 理由にならないでしょう.
このほか「トイウノデハ」と同じように、「デハ」は例えば命令文、推量文などとも直接的な接続が可能であるが、「ノデハ」では無理がある。

69. a. 金も払わないで手伝ってくれデハ, 虫が良すぎないか.
b. 何とか合格するだろうデハ, ころもとない.
このように、発生場面の一例示事態としての内容を提題的にとらえなおしたものが直接引用の「デハ」ということになる。直接引用提題の「デハ」の接続は、次のように節単位においても広く許容される。

70. ~ながらでは, ~たり~たりでは, ~し~しでは, ~たらでは,
~してからでは, ~するからでは, ~てもでは, ~のにはでは,
なお、理由条件の列挙に際しては、類似的なもののほかに、肯定、否定の選択関係が提示されることも少なくない。

71. a. 安かろう、悪かろうデハ、客も寄り付かないはずだ。

b. 彼がいるいないデハ、雰囲気はまるで違ってくる。

(; 彼がいるのといないのとでは, ...)

以上「ノデハ」、「トイウノデハ」、「デハ」という間接、直接引用提題の用法を見てきたが、総じて周囲の反応を念頭において事態を俾睨^{へいげい}しながら、評価をくだすところに特徴が見られる。結果的には話し手の主体や責任にもとづく判断よりも、一般通念としての裁断がきわだっている。

5. 4. 「～ナクテハ」と「～ナイデハ」

ここで、否定文接続の「～ナクテハ」と「～ナイデハ」にあらわれる意味のあり方について述べておくことにする。

72. a. 今から行かなくては、間に合わないだろう。(? ナイデハ)

b. 家にいて何もしないでは、つまらないだろう。(? ナクテハ)

この二つをくらべてみた場合、a. b. の成立に異同が生じるのは、b. が「何もしない」という完結的な状況設定が前提となっていることと関係する。b. は「デハ」で直接受けるほうが文としての座りはよい。「ナクテハ」が自然にあらわれるのは、

73. 駅から近くなくては、部屋を借りる人も少なくなる。

のような形容詞の否定形接続であったり、

74. 魁皇とともに悩める怪物が目覚めなくては、二子山勢の天下は揺るぎそうにない。(朝日1996.9.21.朝刊)

のような、「～ナイコトニハ」「～コトナシニハ」という言い方に近い否定条件を明示する場合である。また、「ナクテハ」の後には必然的に「～ナクテハナラナイ」という意味を含意したうえで、主節との関係性が具体化されていることがわかる。

75. a. 今から始めなくては、競争に乗り遅れる。

b. このバイトで時給千円はもらわなくては、割にあわない。

75. の例では「ナイデハ (イケナイ / ナラナイ)」に置きかえられない¹⁶⁾。このほかにも「～コトナクシテハ」、「～ナイウチハ」などもこうした表現と

類似的な要素が観察されるが、省略する。以上見てきたように、派生的な「テハ」の構文においては、基本的な「テハ」の構文と比較して、引用という観点から、周囲の文環境を射程においた、談話的、対話的な機能性の高さがより強く感じられる点を考察した。

6. テハ条件文の談話的な機能

テハ条件文の考察にあたっては、それを含む文意において理解するだけでなく、その前後の文環境における関係性を見ることが肝要である。ここでは比較的よくあらわれる文脈的な特徴を例に、以上の基本的構文、派生的構文の双方においてみられるテハ条件文の伝達性について考察する。

6. 1. 留保、助言の機能

テハ条件文は、中止形、つまり基本形や終止形のような言い切りの形でなく、事態が遂行される推移を中断し、「テハ」で言い終わることによって生じる余情的な構えがしばしば表現者の対聞き手姿勢として示される。

76. 町の審議会委員をしていて視察に同行することになったのだが、公費出張である。物見遊山との批判を受けては、と少々緊張の一泊二日のバス旅行だった。（朝日1994.9.21.夕刊）

上例では不都合な事態の生来が明らかである場合、あえて主文に明示しなくても聞き手にも了解されるという見越しが前提となっている。また、こうした用法の延長に相手に意向をたずねたり、助言を差し向けたりする言い方も顕著にあらわれてくる。結論は相手の決断、判断にゆだねようとするところに、「テハ」の婉曲性が見られる。

77. 三十歳をすぎてこんな無為の日々をおくっているようでは、という為体の知れない不安もあった。（雪）

この例も従属句のみでなかば独白的に述べることによって、すでに結果事態が見越されているということを示している。これも明確な主張を抑制した「テハ」の特徴として考えることができる。助言の機能としてはテハ以下が略されることもあるが、次のように主文が明示される場合が多い。

78. 「少し、家で休まれてはいかがですか」表面は親切だが、男手は不用といたげな口ぶりである。(麻)

79. 政治家たちも、ときには他国の歴史教科書などを、のぞいてみてはどうだろうか。(朝日1994.9.1.夕刊)

6. 2. 注釈的、反芻的機能

「テハ」には、文脈の流れのなかで、ある条件を含みつつ、その限定された状況のなかで注釈的な表現として用いられることがある。

80. こう言ってはナンだが、東京のマチにはおばあさんがいない。おばあさんがいるのは、もっぱら家の中だ。(朝日1988.6.3.朝刊)

81. こんなことをいっては気を悪くされるかもしれませんが、僕は医師の態度が腑に落ちないのです。(麻)

観察の事態は複数の現象を並列的に述べることによって効果的に提示される。次の例は累加、対比という特徴が「テハ」によって示されている。

82. 自分の小説のなかで作中人物が樹の影に感銘を受けるとき、声に出してはもちろん、心の中でもかうつぶやきはしないことに興味を感じたのである。(樹)

83. 日本は六回、鈴木の中前安打の後、井口が右中間に本塁打して勝ち越し。投げては三番手の三沢が直球を主体に活躍した。(朝日1995.6.24.朝刊)

「～してはもちろん」は「～するのはもちろん」という言い方に置き換えられる。また、「テモ」に置き換えることもほぼ可能である。対象を観察する姿勢は「～以上」「～限り」という表現に近いものがある。

84. 初めてみる有刃凶器傷だが、肉体がすでに腐化し始めていては、それも無意味な一つのしみにすぎなかった。(悲)

「～とっては～、～とっては、～」の形で対比的な現象を示すと同時に全体として反復的な現象をも示す場合がある。これもテハの注釈的表現の類型としてとらえることができる。¹⁷⁾

85. 時間に遅れたといっては文句を言い、車の待ち合わせ場所を間違え

た い っ て は 気 が 利 か な い と 叱 言 を 言 っ た . (男ど)

6. 3. 付帯条件をともなう判断

「テハ」の使われる状況をみていくと、直接、文として提示されるというよりはその前に付帯的な状況がある場合が多く観察される。例えば用例86.のように「たしかに」で始まる文があれば、それに呼応、または修正したり補足したりするような形で「テハ」の文があらわれている。

86. た し か に 私 の 職 業 は あ ま り 安 定 性 が な い . し か し , い く ら 不 安 定 な 稼 業 で あ ろ う と も , 父 の 養 鶏 で 助 け て も ら お う と は 思 わ な い . そ れ も こ ん な 狭 い 町 中 の 庭 先 で 「 生 ミ タ テ 生 玉 子 ア リ マ ス 」 と 看 板 を か か げ て 売 る ほ ど た く さ ん の ト リ を 飼 わ れ て は か な っ た も の で は な い .
(家)

「テハ」はこうした一つのまとまった文脈、談話を構成するうえで、^{かなめ}要となるような働きがある。また、いったん提示した説明を否定するような形で補足説明がなされる場合があるが、その際、適当な接続語が用いられる。

87. 私 は 女 の く せ に 生 れ つ い て の 物 臭 さ で , ま め に パ ッ ク や マ ッ サ ー ジ を す る の が お っ く う な の で す . そ う か と い っ て , 年 よ り も う す 汚 く 老 け 込 ん で は , 公 私 と も に 差 し さ わ り が あ り ま す . (男ど)

また、次のように「もっとも」「ただ」という接続詞的な副詞に導かれて、「テハ」に続く文で補足説明が続く場合がある。

88. 隣家の樹木や物置が、多少、自分の土地に越境してきても、あまり文句をいわない。 も っ と も , 最近の札幌のように地価が高くなってきては、陽 気 に か ま え て も い ら れ な い が , そ れ で も 塀 は な い か , あ っ て も 低 い . (北)

これもテハ条件文が前掲内容に強く関与しながら、修正をほどこしたり、また補足や注釈をおこなうといった機能をそなえていることが了解される。

6. 4. 逆接条件との併用

「テハ」は「テモ」をはじめとする逆接表現と前後して用いられることが多い。これも「テハ」のもつ対比的、ないし注釈的機能の一つのあらわ

れといえよう。¹⁸⁾

89. その各々の人が納得するまで説明していては、時間がいくらあっても足りない。(麻)

90. あまり逆らってばかりいては自分に不利になるだけだと思いつつも、そのような警察の体質に反発を感じてしまうのだ。(崖)

次は、「テモ」などの逆条件節が「テハ」に先行する場合である。

91. 乗り物のロケットはうまく飛んでも、肝心の荷物がごみになっては、もともともない。(朝日1994.9.1.朝刊)

92. なんぼ気が強うても、穴の中に入ってしまっては、じたばたしても、どうにもならねえぞら。(不)

93. 「せっかく今までいい気分でいたのに、そんな返事されてはげっそりしてしまう」と教官は苦笑した。(夏)

次の例では「～だけに」という接続語が「～ということを考えた場合」という説明状況をさし示している。

94. 遅いな、といいかけて、高仲は言葉をのんだ。妻の戻りが遅いことは二人の娘も案じているだけに、父親がいいだしては不安がつるばかりである。(麻)

これらの連文には連続する文脈の流れにおいてある種の“定型化”が観察されるであろう。周囲の状況を配慮し、文意の均衡をとることで、判断の中立化がおこなわれるが、それは「テハ」が対比、注釈などの状況観察的な機能を強く有していることにもよる。談話的な機能というの¹⁹⁾は、ある文型の多面的なあらわれ方が顕著であるという特徴を意味している。

以上、「テハ」の文脈にあらわれる談話的な機能性について、いくつかの例を見てきたにすぎないが、他の文型的、副詞的要素との共起関係においては、特徴的なふるまいが観察される。

7. おわりに

本稿の考察から、テハ条件文にはさまざまな形式が見られると同時に、

その機能性についても注目すべきふるまい、現象が認められた。ここでその特徴をいくつかの要点として確認しておくことにしたい。

1]. テハの従属節には後件を誘導・決定する機能が他の条件形式よりも強く見られ、「ハ」の他動性、取り立て、引用・例示的な機能とともに、主節における結果事態を必然的にもたらすという統括作用が見られる。

2]. テハ条件文が多く自戒や、警告をあらわす表現を担う背景には、話者の経験的知識、情報に立脚した「ハ」の集約的な言いさしと、個の判断から一般的判断へと向かう主張が含意されている。

3]. テハ条件文を主節の叙述展開からみた場合、従属節には理由と条件の二つの性格が観察される。後件の発生をあらかじめ見越したこの理由条件の設定は、他の条件表現とは異なるテハ条件文独自の発話姿勢をあらわしているといえる。

4]. テハ条件文の派生的構文である「ノデハ」「デハ」には、描写素材をそのまま受けて提題化する機能において顕著である。特に「トイウノデハ」「デハ」にはモダリティを内包しうる点において基本的構文にはない文脈依存的な特徴が見られる。

5]. テハ条件文の語用的特徴としては「～しては」という後件を留保した言いさしの形で余情的判断や提案をあらわすことがある。そのほか、他の複文要素とともに競合的にあらわれることも多く、周辺の言語情報に対する説明的、示唆的な発話意図がうかがわれる。

テハ条件文の伝達性、発話意図を考えてみると、共有的な情報の検証のもとに、発言者の責任主体を明示するよりは中立的立場から不特定対象へと向かう姿勢が感じられる。背後に期待や勧めを含意しながらも、主体的な主張、認識を抑制した婉曲的な表現性がみられる。またそこでは、話し手と聞き手との心理的スタンスをとりながら、社会通念としての評価や、訓戒を垂れる表現となっていることにも注目したい。テハ条件文が口語的であり、より会話的な場面において頻出するという特徴も、そうした知識²⁰⁾情報を共有する場の認識と深い関わりがあるのではないだろうか。

本稿では話し言葉、書き言葉を問わず、従来の視点を出発点とする一方で、独自の意味概念を設定しつつ、テハ条件文の体系的な意味記述を試みてきた。このなかでいわゆる反復現象の「テハ」については詳しく触れなかったが、上記の意味の構成は基本的には通底しているものと見られる。

テハ条件文は他の条件表現とくらべて、一般に外国人の使う条件表現としては、その用途、出現率（使用率）は低い。その背景も考察の対象にしなければならないが、一つは主要な条件表現の果たす意味用法だけで十分と理解されていることにもよるであろう。本稿ではできるだけテハ条件文の特異性を論じてきたつもりであったが、結果的には主観的な印象論に終わった一面もあり、とくに、文脈的な展開については今後の考察課題を多く残しているといえよう。「テハ」としばしば類似的な特徴のみられる「～ノハ／コトハ」²¹⁾、「～トハ」の構文との相関などについてもいずれ考察の機会を俟つことにしたい。

【注記】

- 1) 古くは松下大三郎（1934）や三尾砂（1941）、佐久間鼎（1952）の指摘があり、最近では田中（1985）、蓮沼（1987）、塩入（1993）、鈴木（1994）などでもこの二つの用法を中心に考察がなされている。
- 2) 動詞シテ形後置詞につく「ハ」には、「この件にもとづきましては」「先の議論をふまえては」のように、結果事態を誘導する前置き表現として用いられる場合がある。なお、「許してはくれない」のような補助動詞に「ハ」が介入して、排他、留保の意味を否定とともに明示したり、「避けては通れない」のように二つの動詞フレーズの間に「ハ」が介入して慣用的に否定と呼応する連語的形態についてはここでは考察の対象としない。
- 3) 大野（1993）p. 71-72 および p. 73.
- 4) 「テハ」の取り立て性については野田（1994）が仮定条件の取り立ての一種として、また仁田（1995）では「シテ」形の取り立てという観点から、その条件確立の分布を分析している。本稿では「ハ」の取り立て性を「テハ」の条件節の一成立要因としてとらえることにする。
- 5) とくに「ヨウデハ」には「ヨウナコトガアッテハ」の形とともにこうした例示的な性格が強く、収集した用例の中でもその使用頻度の高さがうかがえ

る。また、仮定条件のさしだしも「もし、入院するようなことがあっては」のような婉曲的な表現になることが多い。

- 6) 「ハ」の情意性については尾上(1982)、青木(1992)などに負うところが多いが、他動性、引用・例示性の性格については筆者の「ハ」の解釈にもとづく。なお、有田(1993,1996)では反復のテハとともに「ハ」の集合性をとりあげている。本稿では集合する複数の事態から焦点となる事態を抽出し、そこから予見的な結果事態を導くものと解釈する。
- 7) 「テハ」のもつ情報の共有性や、指示代名詞をともなう特徴については、牧野(1995)などでもふれられている。p. 461-463.
- 8) このほかテハには「今となつては」や「異常な状況にあつては」のように「デハ」の複合辞的な用法として用いられる語彙的表現もみられる。
- 9) 「喚体」の解釈については、「…その直観的一元性の発表にして感情的の発表形式をとることに於ひて、述体の句の理性的二元性の発表たるものと性格と構造との二面に於ひて根本的に違ふものとして対立するものなり…」(山田孝雄 1935 p. 936)などの説明にもとづく。
- 10) テハの主文には話者の断定的な表白が強くあらわされる場合も少なくない。「彼女の生涯を傷つけたという気持ちよりは子供が生まれては大変だという不安がはくの頭にまず浮かんだのだ」(海)
- 11) 蓮沼(1987)では「テハ」の後件にみられる叙述において、反期待性という事態の特徴を仮定し、そこに推論による結論の導きを示した。本稿ではさらに「テハ」の特徴を主節にみられる警告や、自制的な表現の傾向から、本来意図されるべき実現事態を迂言的にあらわすものととらえる。
- 12) 仁田(1995 b)では「ノデハ」を「ノデ」の「ハ」による取り立てという観点でとらえたのに対し、本稿では「デハ」そのものを提題的機能としてとらえる。派生的構文の「デハ」についても同様の解釈にもとづく。
- 13) 「ノデハ」には、一旦述べた内容に対して譲歩的な注釈づけをするような気持ちがみられる。次の例では「～わけではないが」が「ノデハ」の前に先行している点が注目される。このような「ノデハ」は「テハ」に置き換えにくい。「はつきり決めたわけではないが、こうも無気力な生きかたをしていたんじゃ、住む場所でも変えた方がいいんではないか、そんなとりとめのないことを考えたのさ」(雪)「わたし、あなたを信用しないわけじゃないけど、貯金が全部株券に変わってしまうのでは、ちょっと心細いわ」(同上)
- 14) 「ノデハ」と「トイウノデハ」の厳密な区別はむずかしい。ただ後者には前文の言い切り、断定のあとに若干のポーズが感じられるようである。また、

例58.のように「?…噴火のおそれがあるのでは」では文接続が不自然になるなど常に交替が許容されるわけではない。筆者の語感では後者には「ナドトイウノデハ」という引用的例示が強く含意されているように感じられる。次の例でも再度、あらためて裁決を下すといった姿勢が「ノデハ」よりも強くあらわされる傾向がみられる。「追及する側の突っ込み不足も目立った。捜査によらなければ真相解明が進まないというのでは、情けない限りだ」(朝日1995.6.18.朝刊)

- 15) 田中(1994)では「トイウ」の介在が種々のモダリティ形式を言い含めることについて「行くかもしれないというのであれば」などの条件節を例に指摘したことがある。なお、モダリティ的な言表態度は前述の従属節における後置詞的な用法「トアッテハ」「トキテハ」によっても示されることがある。

「彼が病気らしいとあっては／ときはは、…」

「誰にも会いたくないとあっては／ときはは、…」

「すぐにも入院しなければならないとあっては／ときはは、…」

- 16) 「ナイデハ」の「デハ」は假定または既定条件を示す「～デアッテハ」の縮約形とみられ、「～ナイトイウコトデハ」のように前掲内容を根拠として、後の新事態を導く働きがある。「知らないでは／知らないで済まされない」に対して、「知らなくて／知らずに済まされない」がやや不自然に感じられるのは、「知らなくて／知らずに済まされない」という接続関係が成立しにくいという事情にもとづいている。なお、「～ナイノデハ」と「～ノデナクテハ」の異同についても考察する必要があるが、ここでは立ち入らない。

- 17) このほか、談話展開的な特徴として事態を反芻確認するような文脈での用法も多く見られる。例えば次の例では「テハ」を含む文は最初の文(下線部)を言い換えたものとして理解される。「民間企業の自立心が最大のかぎだ。企業がいつまでも個々の経済指標に一喜一憂していては景気は永久に本格回復しない」(読売1996.9.18.朝刊)

- 18) このほか、「テハ」と「テモ」が述語部分を等しくしながら、いわば競合的、並列添加的に用いられる現象として、次のような例がある。「あまえさせちゃいかんし、なれなれしくなってもいかん」(官)

- 19) 本稿では主として書き言葉を考察の対象としたが、「テハ」の出現の諸相はまた実際の会話、対話場面においても考察する必要がある。

- 20) 今回は詳しく触れる余裕がなかったが、テハ条件文には「?もしお金があってはの話ですが」や「?とにかく条件を言ってはですね」のような「ノ」「ダ」に続く、修飾や中止的な機能が弱い点は、他の条件表現と異なる現象

として注目される。これも「ハ」の既知的な情報を限定指示する機能が優位であることのあらわれであろう。

- 21) 例えば「世の常の家庭のように父親がいないことは、やはりその家庭の欠陥が目についた」(雪)での「いないコトハ」と「いなくテハ」との重なりや、また「あんな笑い方をすると／しては批判されてもしかたがない」のような例であるが、一つには本稿で議論した「ハ」の本質が深くかかわっているものとみられる。

【用例出典】

(官)『官僚たちの夏』城山三郎, 新潮文庫1980 (東)『東京ホテル物語』阿刀田高, 中公文庫1988 (六)『六機の護衛戦闘機』高城肇, 中公文庫1990 (麻)『麻酔』渡辺淳一, 朝日新聞社1993 (崖)『崖』小杉健治, 新潮文庫1987 (光)『光る壁画』吉村昭, 新潮文庫1987 (男)『男の座標軸』鹿屋敬, 岩波新書1993 (殺人)『殺人プロムナード』森村誠一, 角川文庫1985 (都市)『都市の遺言』森村誠一, 新潮文庫1990, (不)『不安な演奏』松本清張, 文春文庫1976, (夏)『夏の花』原民喜, 集英社文庫1993, (日)『日本の悪霊』高橋和巳, 新潮文庫1977 (悲)『悲の器』高橋和巳, 新潮文庫1972 (男ど)『男どき女どき』向田邦子, 新潮文庫1982 (北)『北国通信』, 講談社1974 (樹)『樹影譚』丸谷才一, 中公文庫1986, (雪)『雪のなか』立原正秋, 講談社文庫1976, (海)『海と毒薬』遠藤周作, 角川文庫1960, (阿)『阿部昭の18の短篇』阿部昭, 福武書店1987, 週刊ポスト, 朝日新聞, 日本経済新聞, 読売新聞, (バ) Bart 1996.9.9.

【参考文献】

- 青木伶子(1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書店
有田節子(1993)「テハ文の構造と意味について—ハの集合照応性—」平成5年度国語学会秋季大会予稿集
—— 1996 「ハの domain 設定機能とテハ構文の二つの解釈」『言語探求の領域—小泉保博士古希記念論文集—』大学書林
大野 晋 1993 『係り結びの研究』岩波書店
尾上圭介 1982 「『は』の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』第58巻第5号 東京大学国語国文学会
—— 1995 「『は』の意味分化の論理—題目提示と対比—」『言語』第24巻11号 大修館書店

- 川端善明 1958 「接続と修飾—『連用』についての序説—」『国語国文』第27巻第5号
- 金子尚一 1994 「条件形—テハ／—デハとその用法をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』第59巻1号 至文堂
- 佐久間鼎 1983 『現代日本語法の研究』くろしお出版（原版は恒星社厚生閣1952）
- 塩入すみ 1993 「『テハ』条件文の制約について」『阪大日本語研究』第5号 大阪大学文学部日本学科（言語系）
- 阪倉篤義 1993 『日本語表現の流れ』岩波セミナーブックス45 岩波書店
- 鈴木義和 1993 「テハ条件文について」『親和国文』第28号 神戸親和女子大学
- 田中 寛 1985 「条件表現における提題化機能」『日本語教育』57号
- 1994 「条件表現と基本文型」『日本語学』8月号 明治書院
- 仁田義雄 1995 a 「シテ形接続をめぐって」『複文の研究（上）』くろしお出版
- 1995 b 「シテ節の『ハ』による取り立て」『阪大日本語研究』第7号 大阪大学
- 野田春美 1991 「複文における『の（だ）』の機能—『のではなく（て）』『のでは』と『のだから』『のだが』—」『阪大日本語研究』第5号 大阪大学文学部日本学科
- 野田尚史 1994 「仮定条件のとりたて—『～ても』『～ては』『～だけで』などの体系—」『日本語学』第13巻第9号
- 蓮沼昭子 1987 「条件文における日常的推論—『テハ』と『バ』の選択要因をめぐって—」『国語学』150 集
- 牧野成一・筒木通雄 1995 『日本語文法辞典（中級）』The Japan Times
- 松本正恵 1995 「複合助詞の特性」『言語』第24巻11号 大修館書店
- 松下大三郎 1934 『標準日本口語法』勉誠社
- 益岡隆志編 1993 『日本語の条件表現』くろしお出版
- 三尾 砂 1995 『話言葉の文法（言葉遣篇）』くろしお出版（原版は帝国教育出版部1941）
- 山田孝雄 1935 『日本文法学概論』宝文館